

授業実践の振り返り

補習授業校名:ダラス補習授業校

指導者:高橋育子

授業実施: 令和6年11月

学年・教科:高等部1年:国語表現I

単元名:進路講演会を開こう

時	内容	活動	有効であった点	改善を要する点	子どもたちの反応
1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 進路学習とはどのような学習なのかを理解する。 ○ 講演会とはどのようなものか、その目的と概要を知る。 	進路講演会の目的と進路学習とはどのようなものかをスライドに沿って説明を受け、今現在の自分の考える進路とはどのようなものかについて考える。	9月に卒業生を招き、オンラインで進路学習の1回目を行った記憶が鮮明に残っており、その続きとして、より具体的にビザや学費のことなどの話を聞くことができた。	この時間には特にメモを取らせなかったため、7時間全体で一つのノートに残るようになってきた。	生徒たちは、自分の進路について非常に高い関心を持っているので、自分のこととして熟慮している様子が伺えた。
2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 通信文の種類と形式を知り、特徴を理解する。 ○ パネルディスカッションの講師2名へお礼文を書く。 	通信文の特徴を理解し、どのような場合にどのような通信手段が有効かを理解し、形式的な手紙の書き方に沿ってお礼文を書く。	実際に話してもらった卒業生を思い浮かべながら、教科書の例文に沿って、簡潔に書くことができた。	正式な文章を書く機会がほとんどないので戸惑いがあった。見本などを数種類用意するとよかったかもしれない。	敬語の使い方が難しいと言いつつも、自分なりに言葉を出して、友だちと確認したり、聞いたりしながら文章を書いていた。
3	依頼とはなにか。ふさわしい形式と内容について理解する。	依頼文の内容について個人、ペアで考える。	個人で考え、さらにペアで考えを深め、それを全体でシェアできた。	時間配分が十分でなかったため、シェアの時間が不足した。	個人⇄ペア⇄グループの話し合いに慣れてきたのでスムーズだった。
4	相手や目的に応じて表現を工夫して依頼状を書く。	メールに見立てたノートに依頼文を作成する。	国語力の差が出る作業だったが、ペアやグループ内での助け合いがあった。	書き終わった文章を全体でシェアする時間が十分に取れなかった。	文と文のつながりや最後の挨拶に難しさを感じていた。
5	講演会直前準備 <ul style="list-style-type: none"> ・当日の次第を作成 ・係分担(会場設定・司会・タイムキーパー) ・簡単なリハーサル 	<ul style="list-style-type: none"> ・係分担とリハーサルを行う。 ・挨拶をする(事前に連絡を受けた人)はその準備を行う。 ・講演に対してある程度の質問ができるように各自心づもりをし、準備しておく。 	事前に係と仕事内容を把握しておくことで、本番は落ち着いて取り組むことができた。また今回は3回目の会の開催だったため、会の流れを把握しており、慣れてきた感じがあった。	特に改善する点はない。生徒たちも持ち回りで仕事をしていた。	会を重ねるごとに流れが理解できており、スムーズにできたと感じていた。

6	講演者:本校卒業生 公認会計士:藤井誠一 氏	メモを取りながら講話を聴いたり、質問をする。	会に際し、自分たちで依頼し、会を運営したことが、生徒の主体的に授業に取り組む姿勢につながった。	会場の関係で、講話者と生徒の距離があり、後ろの方に座った生徒はスライドが見にくそうであった。	非常に積極的な態度で話を聞きながら、メモをとっていた。また、係に当たった生徒も大変よく仕事をした。
7	お礼状の作成(まとめ)・自己評価	メモをもとにフォームに学習のまとめをする。	講演会の内容をアウトプットすることで、自分の学びをさらにまとめることができた。	初回に進路に対する意識調査を行えば、1か月の授業で生徒の進路に対する気持ちの変化を見ることができた。	形式的なお礼ではなく、心に響いたことがそのまま文章になったと思えるような感想が多かった。
<p>伸ばせた力、子どもの変化、保護者の反応など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通信文の利点などを踏まえ、講演会の依頼状としてふさわしい内容と敬語の使い方を考えることができた。 ・個人作業⇒全体へのアドバイス⇒グループ内での読み合わせ・アドバイザーの活用で日本語力のレベルの差があるものの、めあてが達成することができた。 ・質問の仕方、講演者に対する言葉遣いについても相手に失礼なく、適切に行うことができた。このような機会を年に3回持てたことは生徒のよい経験となり、役割を全うしたことでそれぞれの自信につながった。 					
<p>所感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7時間を通しての総合自己評価は全ての生徒が90%以上の達成率だと回答したので、生徒も充実した授業となったと考える。 ・AG+OGO B部会の研究授業としては、補習校卒業生という人材を生かした取り組みとして他校にも参考になった。 ・ただ話を聞くという講演会から、自らが会を運営したという経験は敬語の使い方や文章を書くことと以上に生徒たちにとって貴重な体験となった。また、講師が卒業生だったという点も、自分たちと同じ道を歩んだという意識が芽生え、より積極的に学習に取り組めた一因である。 					